

生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる

～言語活動の明確化と充実を目指して～

藪 陽介

美術科では、創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てることを目標としている。そして社会的にも、美術文化に触れ、情操豊かに生活していきたいという欲求も高まっている。そういった流れのなか、中学校美術教育の果たしている役割は何かを改めて問い直し、生涯学習という視点からの実践を考えてみたい。

I はじめに

～これまでの研究の経緯～

本校では、昭和41年度（1966）以来「主体性の高まりをめざす課題学習」を主題として、継続的に研究に取り組んでいる。美術科においても、「発想から完成までの過程の重視」「生徒自身が題材をある程度自由に選択する」「個人がそれぞれのペースで仕事を進める」などの工夫について研究が進められた。また昭和51年度（1976）からは、「主体性の高まりをめざす課題学習の学習過程はどうあればよいか（学習の仕方の学習）」が副題として掲げられ、それまでの見直しが図られている。昭和61年度（1986）からは、「学ぶ意志の形成」が副題となり、情意の面からの研究が進められた。この間、一人一人に目を向けることに重点を置き、生徒が表現したい「内容」や、表現の「方法・技法」の選択幅に目を向けることで、より一人一人の表現意図が生きる課題設定の工夫が検討された。平成6年度（1994）からは、「感性を生かした学習」を副題として掲げ、個人からさらに個人の内面へ目を向けて、豊かな感性を育む創造活動の指導のあり方・工夫を模索しながら、主体的な人間の育成をめざした課題学習についての研究が進められた。さらに平成12年度（2000）では新学習指導要領に沿って「豊かな創造活動を育む美術の学習の基礎・基本」という副題で進められた。

そのような流れをうけ、平成16年度（2004）より、基礎・基本の定着を図り、生涯にわたり美術を愛好する

心情を育てることを主眼に取り組んでいる。

平成18年度（2006）までは、確かな学力を身につけるための指導と評価について研究を進めた。美術科における確かな学力とは、基礎的能力の定着ととらえている。具体的には学習指導要領でも引き続き示されている「スケッチの技能」の育成に関する指導法や、絵の具の混色法、平塗りの技法などを始めとした具体的トレーニングのメソッドについて提案した。

生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる要素として、「基礎的能力の育成」に加え、さらに「鑑賞の充実」を掲げた。中学生の時期に作品の味わい方を学んだり、古今東西の作家を始めとする芸術文化について知ったりすることは、将来的に大きな意味をもってくると考える。実際に美術館に足を運ぶことはもちろんのこと、街でふと見かけたり、テレビなどのメディアを通して見た作品が、中学校での鑑賞を想起するものであれば、更なる興味を抱くきっかけになるであろう。そのような素地をつくる美術教育を展開していくことが重要であると考える。アクションペインティングの鑑賞を目的として、自らも作品制作を体験することでよりその作品世界を理解することにつなげたり、プロダクトデザインの鑑賞をして日常生活に美術的な感覚を持ち込んだりする実践などを提案した。

平成20年度からは、「学びあい、自ら学ぶ」を副題として、研究を進めた。その一つに、抽象絵画の先駆者の一人であるモンドリアンの鑑賞を通じ、制作の過程を追

体験するワークを行い、色彩と形に対する感覚を豊かにさせるねらいで取り組みを行った。自分なりの配色で制作した作品について、その意図を説明するとともに、友達との意見交換をする中で「学びあい」ながら、今まで気付かなかった新たな見方について考えを深める（「自らの学び」）ことができるよう設定した。

平成22年では、自分が調べたユニバーサルデザイン（UD）作品を選んだ観点について相手に伝えるとともに、互いの考えのよさや違いについて理解することをねらいとして行った。前時に、「UD7つの原則」について能動的に考えさせる展開で授業を行ったことで、課題意識をもって本時までに、UD作品を調べることにつながっていた。また、導入時にグループで自分が調べてきたものについての発表を行った。全員が表現し、伝え合う場面が設定でき、本時のねらいを意識するよいきっかけとなっていた。生徒が調べてきた内容について事前分析することで意図的に指名を行い、話し合いを進めながら、新たなUDを見る視点に気付くことができるよう授業が展開できた。美術科においては、ひとたび制作に入れば個人的な作業に終始しがちである。しかし、学習過程の様々な場面で友達と学びあう場を意図的に設定することで、個人制作のみでは得られない効果が多く期待される。また、それをきっかけとして新たな自分の学びが構築されと考える。

さて、その取組を受け、平成23年度より本校の研究副題として「課題学習における言語活動の明確化と充実」を掲げ研究を継続している。学びあいにおいて言語を介した活動は不可欠とも言える。美術科における言語活動はある意味において、創作された作品があるために直接的には一線を画されてきた感も否めない。しかし学習指導要領での〔共通事項〕で示されているとおり、形や色彩から感じ取るときに、感覚を言語化していくことが、自らの感覚を整理したり明確化したりすることにつながる。さらに言葉を介することにより、他者との話し合いのなかで、学びを共有できる。加えて鑑賞活動において言語は必要不可欠なものであるのは言うまでもないことである。本年は、「美術科における言語活動の明確化」を重点としてその取組の一端を紹介する。

Ⅱ 研究主題設定について

2006年2月中教審答申では、② 具体的な教育内容改善の方向のイ 豊かな人間性と感性の育成として以下のように述べられている。

「表現する楽しさや喜びを味わうことを通して、生涯にわたって音楽や美術などに親しむ態度を育成することが大切である。また、芸術文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたり態度や実践も重要である。特に、鑑賞は創造行為であり、自分なりの意味、新しい美、自分を発見するなどを大切にする必要がある。」

平成23年3月に国立教育政策研究所教育課程研修センターから、「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果（小学校・中学校）」が出された。そのなかのアンケートでは、「美術の学習が好きである、大切である」という意識をもっている生徒は約6～7割、「美術の学習は生活を明るく豊かにすることや心を豊かにすることに役立つ」という意識をもっている生徒は約7～8割、という結果に対して、「美術がふだんの生活、将来の生活や社会に出て役立つ」という意識をもっている生徒は約5割であった。それは同時に保護者や世間一般の見方であるとも言えるであろう。

学習指導要領でも「生きる力」を根幹に、美術という教科として生活に生きて働く力を主眼として打ち出されている。これからの時代、美術・音楽を始めとする芸術文化が生活や人間性を豊かにしていくことが大切になっている。そのためにも義務教育最後の必修となる中学校美術の在り方をこのような視点で捉えていく必要性を強く感じる。美術教育は、「形と色彩」で美しく表現する能力や美の感受・芸術文化の理解などを学ぶ教科である。基礎的・基本的な知識・技能を身に付けた上で、自分なりの創意工夫ができるという体験は、喜びを感じるものである。また、コミュニケーションの際、言語に加えて視覚に訴え効果的に伝える能力（ビジュアルコミュニケーション能力）も今日求められる力である。さらに文化伝承の側面からも、美術の価値や歴史を知り鑑賞する能力を高めることは、国際人としてまた一個人としても必要なことである。

そこで、現在我々に求められているのは、美術の教科性について生徒の目線で示していくことであろうと考えている。そのことが、保護者にとって、あるいは社会的に本当の意味で理解されていくことにつながっていくのだと考える。

Ⅲ 美術科における課題学習

美術科における「課題」とは、対象を見つめ感じ取った形や色彩の美しさ、想像したことなどを基に自分自身が表現したい主題を生み出すことから始まる。さらに、主題をよりよく表現するために、形や色彩、材料などの構成を練ることが構想の段階での課題となる。また、鑑賞においては、作品などに対する自分の価値意識をもつことと捉えている。

以下、それぞれの学習過程における具体について示す。

課題設定

- ・ 題材への興味・関心の喚起
- ・ 共通課題の明確化

課題把握

- ・ 情報や知識の収集、調査、分類
- ・ 五感を働かせての観察、体験
- ・ 個人の主題の見出し

課題追求

- ・ 収集した情報をもとにした発想・構想
- ・ 個人の主題の明確化

課題解決

- ・ 個人の主題に沿って、適する表現方法の検討、選択
- ・ 素材、技法などの吟味

課題の定着

- ・ 個人の主題を基にした作品制作
- ・ 他との意見交換

学習の様々な段階において、何よりも課題意識をいかに高めるかということが重要になる。そのためには、生徒にとって必要感のあるものでなくてはならない。そこで意識せねばならないのは、生活との接点を示すということであると考え。現在授業で展開されている内容と実生活がどのように関わってくるのかという視点を常にもたせるということである。社会的には美術文化への欲求が高まっている一方で、学校で行っている美術教育は別のものという意識で、生徒たちは捉えてはいないだろうか。例えば、同じ題材でも、導入で実生活にリンクした場面を提示したり、鑑賞場面で、作品を使ったり飾ったりする過程を仕組むことで、十分美術を身近に感じられるものにできるのではないかと。

そのような創造活動を通して、「主体性」や「生きる力」

を育むことが生涯にわたり美術を愛好する心情の育成につながると考える。

Ⅳ 美術科における言語活動

今回の学習指導要領改訂では「思考力・判断力・表現力の育成」が重視された。これらを育むため、学習活動の基盤となる言語に関する能力を育成し、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組むといった方向性が打ち出された。

しかし、先述したように、一般的に美術科の取組において、言語活動に留意してきたとは必ずしも言えない状況にある。ただし、美術科における言語として、「文字や音声による言語」と、「形や色彩、イメージによる視覚言語」があることも確認しておきたい。後者においては、特に美術科の特質において、主要な要素として取り扱われてきたことがらであり、これまでも意識して学習を展開してきた。ただ、ここで大切なのは、「形や色彩、イメージによる視覚言語」と、「文字や音声による言語」の双方を関連させて考えていくことにある。一般的に美術の作品は視覚的に感知されるものであり、「言葉では表せない」、「説明できない」ものと捉えられている。さらに、そのような認識のなか、あえて言葉での説明を避けてきたというところもある。しかし、そのために作品表現が独りよがりなものに留まったり、鑑賞する際の思いが同じく独善的、もしくは感想自体もてないという状況に陥ったりすることがあったのではなかろうか。

「文字や音声による言語」化することで「形や色彩、イメージによる視覚言語」という抽象的なものを、誰にでも共有できるものとして一般化することができる。いわば「可視化」することができる。イメージから成る美術の世界だからこそ、言葉で説明することにより、自己の表現をより明確にするとともに、他者に理解されるよう伝えることができる。したがって、言語活動を意識的に取り入れていくことにより、さらに美術科のねらいに迫ることができるのである。

ここで、「中学校学習指導要領解説 美術編」、「言語活動の充実に関する指導事例集」を基に滋賀大学新関伸也氏によりまとめられた美術科における言語活動の意義と、言語活動を充実するための指導の観点を挙げる。

美術科における言語活動の意義

- ①言葉によって、形や色彩、材料などの造形を捉えるための視点が明確になり、また、新たな概念がもてること。
- ②言葉によって、自分の感じ取ったことや、考えを整理し、明確化することができること。
- ③言葉によって、他者と話し合ったり、説明し合ったりすることで学びを共有化し、自分の見方や感じ方を深めたり、広げたりすること。

言語活動を充実するための指導の観点

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
(感じ取ったことや考えたことを言葉に置き換える、など)
- ② 事実を正確に理解し伝達する
(デザインなどにおいて図やサインなどの視覚言語に文字言語を加え事実を伝える学習、など)
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする
(シンメトリーなどの用語を用いて説明したり、鑑賞において表現意図を解釈し説明する、など)
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
(鑑賞において、自己の価値観に基づいて評価や批評する活動、など)
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
(スケッチなどをもとにアイデアを練ったり、作品を制作したりする一連の活動、など)
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
(鑑賞などにおいて、作品に対する考え方を伝え合い、互いに深めていく活動、など)

以下、これらの観点に基づき、実践事例を紹介して、美術科における言語活動について考察していく。

実践事例 1

題材名

「ユニバーサルデザイン (UD) を考える」(3 学年)

次	学習活動	配時
1	UD を知る ○ UD の原則について知る。 ○ 生活の中から UD を探し、 <u>レポート</u> を作成する。 ○ 友達が見つけた UD を相互鑑賞する。	1 課外
2	UD をつくる ○ 自分が調べたものがデザインされた背景について考える。(各自) ○ 考えの似通った生徒別にグルーピングし、不便さを解消する UD を開発する。 ・開発する対象を絞り込む。(グループ) ・UD のアイデアを練る。(各自) ・各自のアイデアを持ち寄り、グループのアイデアとしてよりよいものになるよう検討する。 ・グループとしての案を <u>プレゼンボード</u> にまとめる。 (グループ)	1 3
	○ プレゼンテーション、相互評価 (全体) ○ 自己評価をする。 ・話し合いをする中で、自分の考えが新たに広がったことについてワークシートに書く。	1

UDには一般的に7つの原則があると言われている。これらを導入段階で明確にすることにより、そのような視点から取材活動や発表活動を行えるようにした。生徒の中に共通の言語をもたせておくことは、デザインのもつ価値に根拠を与えることにつながり、相互鑑賞での話し合い活動において有効に働くと考える。その要素に基づき、自分が見つけたUDの価値を十分に感じ取った上で、相互鑑賞し批評し合う活動を取り入れる。その中で自分が気付かなかった新たな価値を話し合い活動の中から見出し、多様な見方や考え方を養うきっかけとした。鑑賞活動は、言語を介してコミュニケーションを図ることにより、より深いものとなる。このように、共通のキーワードをもとに相互鑑賞させることで、感覚にたよりがちになる鑑賞の視点が明確

になると考えた。

＜この題材で充実させる言語活動＞

②事実を正確に理解し伝達する

：UD の取材活動や、グループでの UD の開発において文字や絵で説明する。

④情報を分析・評価し、論述する

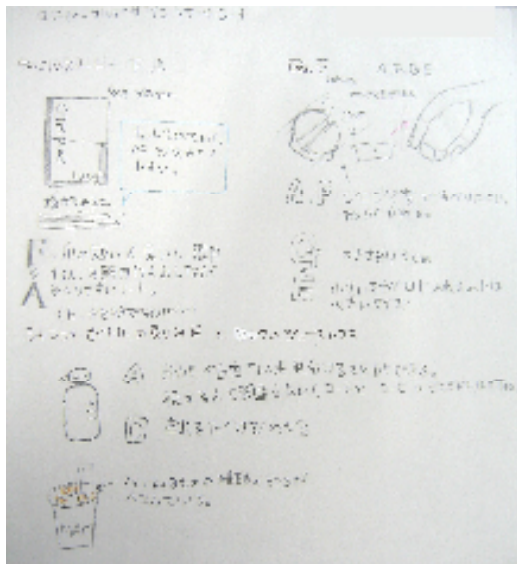
：UD の取材活動でどのような視点でUD だと思ったのか、友達が選んだUD について自己の視点をもつ。

⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

：全体の鑑賞活動において、互いの見方の違いなどを深める。

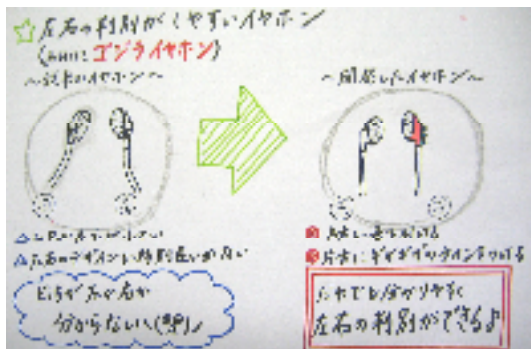
＜生活のなかから見つけたUD のレポート＞

UD の 7 条件のなかでどれがあてはまるのか、そのキーワードとそう思った理由についてメモしておく。



＜不便さを解消するUD をグループで開発したプレゼンボード＞

改善した点についてよく伝わるように、簡潔に図や言葉で表現する。



実践事例 2

「あかりのかたち」

(紙による照明器具のデザイン) (2 年生)

次	学習活動	配時
1	○参考例の鑑賞・分類とネーミング ・照明器具の参考写真を見て、「あかりのかたち」としてどのように分類できるのかについて考える。 ・分類したものにそれらの特徴が表れるようネーミングする。	1
2	○紙の加工法とあかりの関係を探る。 ・実験用紙を使い、様々な加工法を試す。 * 前時にネーミングした加工法をキーワードに発想の手がかりにする。 * 提示した加工例を基に、徐々に独創的なデザインに変化させていく。 ・その都度、実験ブース (段ボール箱で擬似的に暗い場所をつくる) であかりの効果を確かめる。	3
	○本制作 ・試作を繰り返し、形が決まったら、ケント紙を使って本制作を行う。	2
	○鑑賞、自己評価・相互鑑賞 ・教室を暗くして学級内鑑賞会を行う。	1

＜この題材で充実させる言語活動＞

①体験から感じ取ったことを表現する

：提示した参考例の写真を、そのあかりの効果により分類し、ネーミングをする。

④情報を分析・評価し、論述する

：キーワードを観点として、鑑賞において、自己の価値観に基づいて評価を行う。

⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

：キーワードを基に主題を設定し、作品を構想しよりよいものに改善していく。

<作品制作の思考の流れ>

- ①情報を収集する段階
- ②収集した情報を「類型化」「体系化」する段階
- ③その結果から自分の好みの位置づけを割り出す段階
- ④好みを主題として制作する段階

この4段階の思考の流れは、主題（自分がつくりたい作品の方向性）を明確にして作品を制作する際に必要なものだと考えている。例えば、作品のテーマ設定や、技法など、制作するときには自己の選択の連続がともなう。一般的な誤解に、「独創的なアイデアというのは、その人のもって生まれたものである」ということが語られるが、決してそうではない。個性的なアイデアをもつ人ほど、大量の情報を収集、整理し、選択した上で、自分の個性を少し加えているものである。ここでは、②の段階として、提示した参考例の写真をそのあかりの効果により分類し、ネーミングをする。つまり、視覚として示されるあいまいな情報を言語化することにより具体化され、つくりたい作品の好みを見出すきっかけとするのである。

いったん言語化されたそのキーワードは、自分が表現したいあかりの効果として主題となり、制作途中も、振り返って自己評価する指針ともなりうる。また、完成した作品を展示して鑑賞会を行ったが、友達の作品のよさを表現する際、そのキーワードを使って鑑賞文を書くなど、鑑賞の視点を与えることにもつながった。

<自己評価カードより>

「あかりのかたち」は紙でつくるということだったので紙の折り目から光がもれたり、キラキラしたりするような感じにしたいと思いました。

このような作品にするために、私は折って跡を付けてから広げてその下にライトを置こうと思いました。最初は球のような形にして、切って折り込んでしまいましたが、だんだん変わっていった半円柱のようなものになりました。

あかりが中にこもって少し外にもれてくるような幻想的なあかりを目指しました。

規則的に穴を開けて均等に光がもれてくるようにしました。穴の形もきれいに見えるように折り返しなどをして工夫

しました。



練習紙を使って、多くのパターンを検討する



ダンボール箱の中であかりの効果を試す



「重ね」を使った作品例



「切り抜き」を使った作品例



「もれ」を使った作品例



「折り」を使った作品例

実践事例 3

「作品制作後の相互鑑賞」

「詩と絵のコラボレーション」(1年生)

モダンテクニックでの技法体験の材料を基にコラージュ作品を制作し、そのイメージから詩をつけるという題材である。大きなねらいの一つは、コラージュした形や色彩から受けるイメージを言葉にすることである。ここでは、詩の形としてまとめるということまでは求めずに、言葉の羅列的なものであってもよしとしている。

また、シンメトリー、リズム、リピテーション、バランスなどの造形要素を表す用語についてコラージュの前に学習する。さらに、既習のデザイン題材(絵文字をつくらう)において、配色の要素(同一、類似、対照色相やトーン)などについても学習している。それらの用語が作品制作や、相互鑑賞の際、有効に働くのではないかと考える。

＜この題材で充実させる言語活動＞

①体験から感じ取ったことを表現する

：コラージュした形や色彩から受けるイメージを言葉にする。

③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする。

：シンメトリー、リズム、リピテーションなどの造形要素を表す用語を基にコラージュしたり、鑑賞の際、解釈する観点にしたりする。

④情報を分析・評価し、論述する

：相互鑑賞を行い自分の価値意識をもって批評する。

⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

：相互鑑賞の後、作品に対する考え方を伝え合い、互いに深め合う。

＜生徒作品と相互鑑賞による文章＞

* 下線部分は、形や色のイメージから受ける印象を具体的に言語表現している箇所



- 花の技法と色合いが合っていてすごくよい。雨のしずくのマーブルリングや、バラのこすり出しなどもよい。全体の配置のバランスもよく、一体感があります。
- 花の形をちぎって作っていて、切るよりも花の雰囲気が出ていてすごかった。葉に使った紙のイメージが全体と合っている。



- こすり出しを多く利用して、もやもやしているイメージがある。 マーブルリングを背景にして、対照トーンの効果で印象深い作品だった。こすり出しの作品と詩がマッチしていてイメージがピタリとはまっている。
- 絵と詩がとても合っていていいと思いました。また、下の色合いが不思議な感じがして強くひかれました。 橋のこすり出しはふせんを使ったと聞いておもしろそうだと思います。見ているだけで様々な考えが浮かんでくる作品だと思います。



- 花の大小があり対比がおもしろい。 蝶の「ぼけ色」具合がとてもよく、迷っている感じがあり幻想的。
- デカルコマニーで作ったものを蝶として発想がすごい。また、花をちぎった紙を重ねて表現していて、華やかな雰囲気を感じました。詩も作品のイメージをさらに豊かにしていると思いました。



- 色が青っぽく統一されている。シンメトリーを使っているが、太陽と月の形の対照も使うことで、奥行きを感じる。
- シンメトリーを使っているが、満月と三日月は違って、まがい探しのようだった。デカルコマニーも水を多く含ませた絵の具を使っているので、優しい雰囲気が出ている。空をイメージしているのだろうけど、深い海の中にあるような感じがする。

実践事例 4

「日本美術新聞をつくる」(2年生)

5人グループ単位で日本美術に関するテーマを設定し、各自が調べる範囲を担当し新聞型式にまとめる題材である。言語活動を充実させるために以下の観点について留意させる。

- ・ 見出しを工夫する
アイキャッチとして、目を引かせ記事を読ませる。
その際、自分が最も伝えたいことを伝えるためのキャッチコピーを考える。
- ・ 図解したり、写真を入れたりして視覚的に分かりやすく表現する。
- ・ 色彩を効果的に生かす。
囲みやアンダーラインなどで強調し、伝わるよう工夫する。

また、最後には一人一人が自分の記事についてプレゼンテーションを行う。その際の留意点として、

- ・ 記事全文を読むのではなく、最も伝えたいことを中心に内容を絞る
- ・ プロジェクターで映すときは、説明に必要な図などをクローズアップにするとともに、指示棒を効果的に活用する。

ということを確認する。

<この題材で充実させる言語活動>

②事実を正確に理解し伝達する

: 図や表などの視覚言語に文字言語を加え事実をわかりやすく伝える。

④情報を分析・評価し、論述する

: 友達のプレゼンテーションを聞き、自己の価値観に基づいて評価を行う。

<作品例>

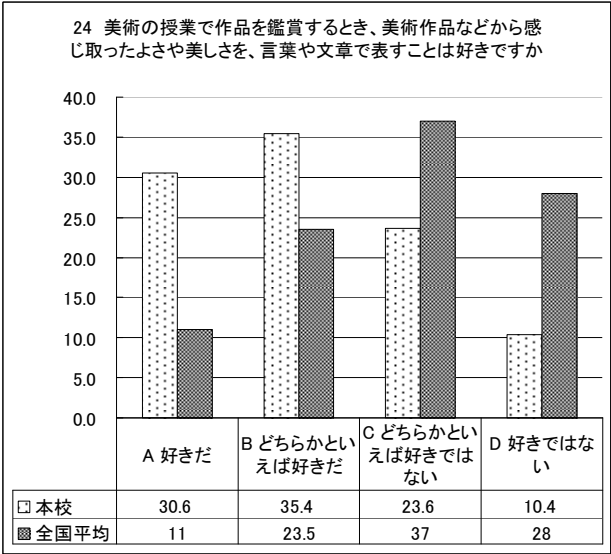


V おわりに

「生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる」をテーマに、継続的に研究を行っている。それに基づき、生活に生きる新たな題材の開発や、学習過程を工夫している。学習指導要領の理念にも「生きる力」を養うことが示されたが、美術科においてもその果たすべき役割を十分理解する必要がある。発想したり、それを形にしたり、あるいは見ることで豊かに感じ取ることができたりする力は、生活や社会に生かしたり、豊かにしたりする態度を育成することにつながる。

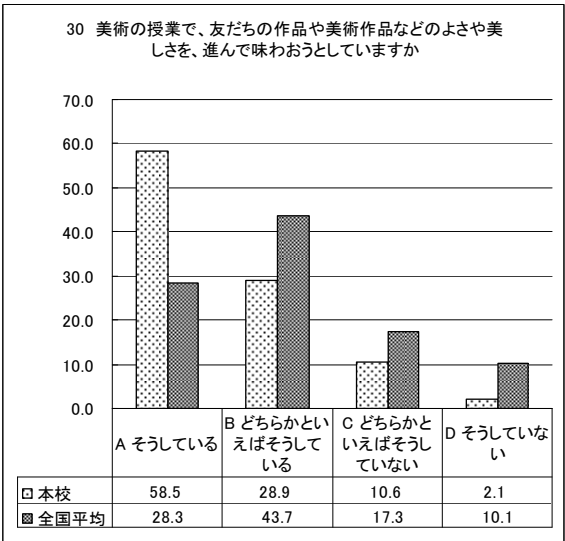
昨年度より、本校研究副題「課題学習における言語活動の明確化と充実」に取り組んでいるところである。この二年間は、美術科における言語活動の明確化に重点を置いて研究を進めている。

昨年度の3月、「特定の課題に関する調査」が国立教育政策研究所教育課程研修センターによりまとめられた。その中に収められた生徒質問紙調査における調査結果に基づき、本校平成23年度3年生の卒業時に、同じ質問項目でアンケート調査を実施した。質問項目「美術の授業で作品を鑑賞するとき、美術作品などから感じ取ったよさや美しさを、言葉や文章で表すことは好きですか」という問いにおいて、全国11%に対し本校30%、どちらかと言えば好きとあわせて66%という結果となった。これは、3年間を通して描いたりつくったりする活動とともに、何らかの形で言語化することを継続的に行なってきたことの現れではないかと考える。また、表現と同時に鑑賞活動にも力を入れてきたことが影響していると感じている。

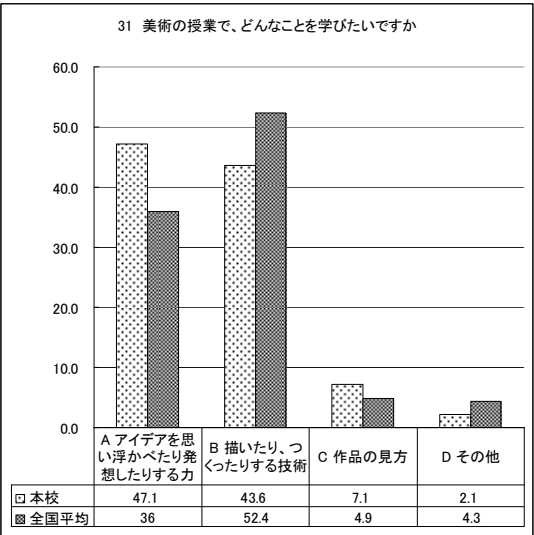


「美術の授業で、友達の作品や美術作品などのよさや美

しさを進んで味わおうとしていますか」という問いに対しては、そうしていると答えた生徒は、全国28%に対し本校58%であった。実践例でも紹介したように、毎題材の最後に設定している相互鑑賞会の効果の現れと見ることができるであろう。



「美術の授業でどんなことを学びたいですか」という問いに対し、全国では「描いたり、つくったりする技術」が最も多いのに対し、本校では、「アイデアを思い浮かべたり発想したりする力」が最も多くなっている。このことは、全国的にはまだまだ美術では作品をつくる教科という認識が生徒、あるいは教師にも根強いのではないかとということである。もちろんそのとおりではあるのだが、生涯を見越し生きる力の育成を念頭に置いたとき、それ以外の項目に発想を転換していかなければならない時期に来ているのではないと思われる。そういった意味では、日頃から「美術という教科は芸術家を育てるためにあるのではない」と語っていることの意味を、生徒たちが感じてくれていることを実感した結果である。



＜参考文献＞

中学校学習指導要領解説 美術編

文部科学省（平成20年9月）

言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】

文部科学省（平成23年5月）

特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果

国立教育政策研究所教育課程研修センター

（平成23年3月）

富山大学教育学部附属中学校美術科

「主体性の高まりをめざす課題学習」『研究紀要』

1966～2011

『主体性の高まりをめざして

～課題学習で学校をつくる～』（富山大学出版会）

富山大学人間発達科学部附属中学校

中等教育資料 H23. 7

「美術、工芸の学習を支える言語活動の働き」新関伸也

同 H20. 8

「中学校美術科における言語活動の充実」村上尚徳